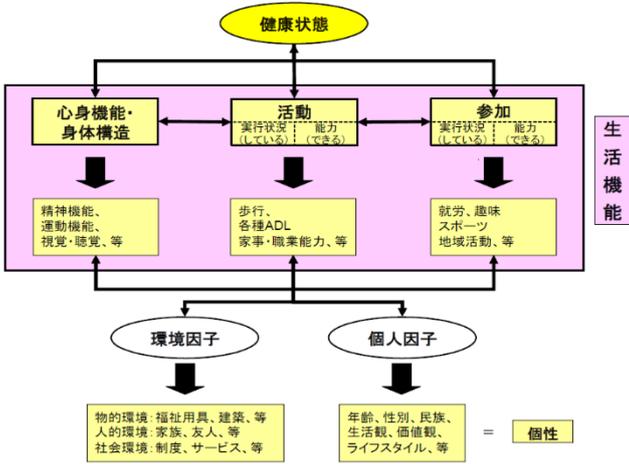


2001年にWHO（世界保健機関）は、ICF（国際生活機能分類）という健康状態や生活機能に関する枠組みを採択しました。

ICFの前身であるICIDH（国際障害分類）による「疾病の帰結（結果）に関する分類」であったのに対し、ICFは「健康の構成要素に関する分類」として、新しい健康観を提起するものとなりました。



【図】ICF（国際生活機能分類）モデル

その特徴は、病気や障害というマイナス面だけではなく、「健康状態」を包括的に捉え、活動・参加・背景因子（環境因子・個人因子）を網羅し、個人の能力や強み、可能性（できること・していること）に着目する視点をもっていることです。そして、生活機能上の問題は誰にでも起こりうるものなので、ICFは特定の人々のためのものではなく、すべての人に関する分類であることも大きな特徴です。

そして、ICFは、各構成要素の相互関係に着目し、生きることの全体像を示す共通言語として、福祉・介護を含む各分野で活用されており、その人全体をみることは、同時に個々の人々の個別性を尊重したケアにつながります。

例えば、脳梗塞という健康状態。この病気自体は誰にでも起こりうるものです。しかし、その後遺症の状況（麻痺の部位や程度）：身体機能・身体構造は人それぞれです。また、それに伴う活動の状況（食事や排泄、更衣など）も人それぞれです。地域や家庭での役割など、参加の状況も人それぞれです。更に、住環境や人的環境（家族の有無や関係性）といった環境因子もその人により大きく異なります。個人因子（年齢や生活歴、趣味、生活）は個性に似ており、更に人それぞれです。（右の写真は脳梗塞（後遺症）とは無関係のものです）

モチベーションや意欲といった因子は、生活機能訓練やリハビリへの積極性につながり、心身機能・身体構造の状況に変化をもたらします。その結果、活動・参加の状況にも変化をもたらします。私たち職員一同、入居者皆さまの、ICFの各構成要素とその相互作用に着目し、日々、自立支援、個別性のあるケアへの取り組みを目指しています。



生きることの全体像を正しく理解して自立支援の促進を。

きもべつ喜らめきの郷・るすつ銀河の杜
喜らめき銀河タイムス

社会福祉法人 溪仁会 経営理念
一、安心・安全
二、信頼・満足
三、地域に貢献





節分 暦の上では春

豆まき & 恵方巻

～「豆まき」～

昔は、病気や災害など悪いものはすべて「鬼」の仕業だと考えられていたため、鬼を退治する効果があるとされる豆を投げる風習が広まりました。

「行事の効果を検証」

<ご入居者にとって>

- ①高揚感：何が始まるのかワクワク等。
- ②運動効果：豆まきの場所まで移動。腕を挙げて豆を投げる。
- ③心理的な効果：笑う門には福来る。「ストレス発散」「気持ちの浄化作用」等

<職員にとって>

- ①達成感・満足感：ご入居者の笑顔が元気の源！
- ②企画力・交渉力：誰に鬼をお願いしよう等。(笑)
- ③チームワークの構築：一人では何事もできません。以上、今後に活かして参ります。事故なく無事に終了しました。まずはこれが一番大切ですね！



～ 恵方巻 ～

節分のとき恵方巻を丸かじりするのは諸説あるものの、江戸時代に大阪の商人たちが商売繁盛を祈願して太巻きを食べる習慣があり、それが由来となったという説が有力です。2月3日の昼食は美味しい恵方巻をいただきました。



<面会時のマスク装着>

インフルエンザが流行しております。

感染症の拡大予防のため、施設内ではマスクの装着をお願いいたします。

ご面会中も外さないようご協力をお願いいたします。

マスクは正しく装着しましょう。



//見学随時募集中//

るすつ銀河の杜